

南蛮漆芸ものがたり

中世末期まで、日本人の海外知識はせいぜい中国、朝鮮、そしてインドくらいにとどまっていた。しかし、天文12年(1543)ポルトガル人が種子島に鉄砲をもたらし、同18年(1549)フランシスコ・ザビエルがキリスト教を伝えたことは、ヨーロッパを中心とする近世の世界史の舞台にわが国を登場させることになりました。

室町時代末期から江戸時代前期にかけて、まずポルトガル人やスペイン人がキリスト教布教や貿易のため来朝し、ついでオランダ人やイギリス人も通商の利益を求めて日本に来ました。彼ら西洋人はわが国の風俗習慣に驚異の眼をみはったばかりでなく、屏風絵、刀剣、漆工品などの日本の美術工芸品に魅せられて、それらを数多く故国へ持ち帰りました。彼等はことに軽くて、丈夫で、そして華やかな文様を持つ蒔絵が好きだったようです。そして、規製品として売られている蒔絵を買うだけでは満足できず、やがては自分たちの日常使う西洋風の器物や調度の製作を日本の蒔絵師に依頼するようになりました。この種の漆工品はふつう輸



南蛮人文様蒔絵印籠
日本・江戸時代初期



花卉文様青貝蒔絵洋櫃
日本・桃山時代

出漆器と呼ばれ、カトリックのミサに使う御聖体容器、蒲鉾型の蓋をもつ西洋風の櫃、および西洋箆笥などがあり、おもに金銀の平蒔絵による草花鳥獣文様で飾られています。大い螺鈿も併用されています。「東洋の漆工」展に出陳されている「草花文様青貝蒔絵洋櫃」「花卉文様青貝蒔絵洋櫃」「花鳥文様黒漆地螺鈿蒔絵卓」は輸出漆器の好例です。

いっぽう、西洋文化との接触は日本の美術にも大きな影響を与え、西洋人來朝の様子を描いた南蛮屏風や西洋画法による洋風画が登場しました。そして漆芸の分野においても、桃山時代から江戸時代前期にかけて、異様な容貌と服装の西洋人や珍しい渡来文物を文様とした器物と調度が数多く作られました。この種の国内用の西洋趣味漆工品として、今回の漆工展に「南蛮人文様蒔絵印籠」と「うんすんかるた文様蒔絵香合」が出陳されます。

南蛮漆芸とは、輸出漆器と国内用の西洋趣味漆工品とを合わせた呼称です。それらは、近世における東西文化の接触が生みだした異色ある工芸品と言えましょう。

季刊 美のたより No.30

昭和49年12月1日

発行 大和文華館